

セミナー 2 : 「シェイクスピア」と出版

本セミナーでは、イギリス・ルネサンス期の戯曲研究における新たな可能性を、「出版」という視点から探ることを最終的な目標とし、16 世紀末から 18 世紀にかけての「シェイクスピア」創成期において、出版者や書籍商が果たした役割を多角的に考察した。

5 月初旬にメンバーが内定した後、6 月下旬から 7 月初旬にかけて、各自が発言内容の要旨（各 1,000 字程度）と参考書誌一覧を作成し、メールで回覧した。これに対して、全員でコメントや質疑応答を行い、内容の共有と各自の発言内容への理解を深めた。続いて、9 月初旬から中旬にかけて、各自のペーパー・ドラフト（初稿）を全員で共有し、2 班（各班 3 名＋コーディネーター）に分かれて班内で意見交換を実施した。その議論を踏まえ、各自が改訂稿を作成し、10 月第 1 週までにメンバー全員に配布した。そして、10 月 12 日の「本番」では、メンバー全員が初めて一堂に会し、程よい緊張感の中で、各自が「完成稿」を発表した。

多様なメンバーが参加したことで、『タンバレイン』が出版された 1590 年から 18 世紀までを俯瞰することが可能となり、出版文化における「シェイクスピア」の成立をめぐる議論に新たな視野が切り拓かれた。また、「ファースト・フォリオのシェイクスピア」の成立過程の検討や、Lukas Erne が提唱する“literary dramatist”としての「シェイクスピア」像の再考、「ジャガード／ペイヴィア・クォート」の再検討、さらに 18 世紀初期から中葉にかけての「シェイクスピア」受容史における廉売競争への注目を通じて、私たちが日頃前提としている「シェイクスピア」像に対するオルタナティブな視座が提示されたことは、本セミナーの重要な成果の一つである。加えて、「シェイクスピア」を中心テーマに据えながらも視野をさらに広げ、クリストファー・マーロウ、ベン・ジョンソン、さらにはフランシス・ボーモントとジョン・フレッチャーの戯曲が「出版」を通じて文字媒体へと変容していった過程について、具体的な事例に注目することができた点も、もう一つの大きな成果である。

各メンバーの発言テーマおよび要旨は、以下の通りであった（発言順、文責は各自）。

§

〈シェイクスピア〉の原像を創った 6 人の出版業者の貢献

ー ロンドンの出版文化における著者像形成の軌跡 ー

五十嵐 博久（東洋大学教授）・コーディネーター

本発表では、18 世紀に形成された「シェイクスピア」像の原型としての「ファースト・フォリオのシェイクスピア」が、1593 年から 1623 年のロンドン出版文化の中でいかに創出されたかを検討した。33 人の出版業者のうち、特にジョン・ハリソン一世、カスバート・バー

ビー、アンドルー・ワイズ、ニコラス・リング、ウィリアムおよびアイザック・ジャガード父子の6名に注目し、それぞれが詩人・劇作家としての「シェイクスピア」像の形成に果たした役割を分析した。詩集の出版、戯曲本の扉への作者名記載、「完全原稿」や「著作集」としての位置づけなど、出版戦略と市場の動向が「シェイクスピア」像の構築に与えた影響を明らかにした。ファースト・フォリオは「シェイクスピア」の「全戯曲集」であることを標榜しているが、その収録作品の選定基準や作者の規定の仕方は、現代における「全集」概念を成立させる基準とは大きく異なっている。本発表では、いわゆる「ファースト・フォリオのシェイクスピア」が、出版者たちの意図と偶然が交錯する中で、商業的産物として創出された作者表象であることを明示した。

Lukas Erne の仕事

小林 潤司（鹿児島国際大学教授）

今世紀初頭、出版史、書物史の視点からシェイクスピアとその作品群をとらえ直そうとする散発的な動きを、ひとつの研究史的転回へと導いたのが、Lukas Erne の *Shakespeare as Literary Dramatist* (2003) であったことは衆目の一致するところであろう。Erne はこの本と続編 *Shakespeare and the Book Trade* (2013) において、「劇場人シェイクスピア」は自作の戯曲の出版に不熱心で消極的だったという従来の「常識」に異を唱え、この宮内大臣一座・国王一座の俳優兼専属劇作家が、読み物としての戯曲を出版市場に供給することにも大いなる意欲を持ちつつ創作活動を行ない、かつ、現に彼が成功した戯曲本作者でもあったことを論証した。

シェイクスピア研究における、21世紀の最初の20年間（9.11からパンデミックまでの20年間に当たる）を振り返ると、作家像への関心が復活し、しかも既存の作家像を根底から覆そうとする野心的な研究が量産された時代であったと言えそうである。たとえば、「共作者としてのシェイクスピア」(Vickers)、「思索者としてのシェイクスピア」(Nuttall)、「宮廷劇作家としてのシェイクスピア」(Dutton) など。「読む戯曲の作者としてのシェイクスピア」を提案した Erne も、あの時代の研究の動向を代表するひとりであると同時に、そのトレンドをいち早く創出しリードした研究者であったと評価することができるだろう。

1619年のクォートに見るジャガードの戦略

— タイトルページの分析から —

森井 祐介（大手前大学准教授）

1619年に出版されたクォート版の「シェイクスピア戯曲集」(「ジャガード／ペイヴィア・クォート」)の題扉に着目し、印刷者ウィリアムとアイザック・ジャガード父子の出版戦略を読み解いた。この戯曲集のうち出版年を正しく記載した作品では、国王一座の劇の印刷を禁じる宮内大臣の圧力を意識して、印刷者名や書店の所在地のみならず、旧版にあった劇団情報も伏せられる一方、作者シェイクスピアの名前に同じ活字が使われることで、統一感が生まれ作品集としての性質が浮き彫りになっている。それに対して、出版年を過去のものに偽装した作品では、国王一座による上演情報が復活し、作者名・題名の表記、粗筋なども作品ごとに過去の版の文言やレイアウトがかなりの程度まで再現されている。しかし、これらは決してオリジナルの完全な複製にはなっていない。1619年のクォートが旧版と異なる印象を与える大きな理由は、ジャガード独自の意匠である。ジャガードはあえて自らの意匠を刻印することで、「シェイクスピア劇」を幅広く手掛けていることを他の書籍業者に認知させて存在感を高め、ファースト・フォリオの企画に参入する足掛かりを築こうとしたのではないだろうか。

英雄活劇としての『タンバレイン』

— リチャード・ジョーンズによる編集を中心に —

坂巻 政彦（慶應義塾大学院後期博士課程）

本発表では、1590年出版のクリストファー・マーロウの悲劇『タンバレイン』の八折本（以下O1）を対象に、印刷・出版を手がけたリチャード・ジョーンズによる前書きと、扉の記述を分析し、O1が作品を英雄活劇として提示している点を指摘した。ジョーンズは前書きで、上演時に存在した笑劇的要素を自らの判断で削除したと述べ、実際の上演とO1との差異を強調する。彼にとってそうした要素は、作品の主題の価値と作家の文才を損なうものであったようだ。O1の前書きからは、出版を通じて『タンバレイン』を「誉高く威風たる物語」として打ち出し、作品の主題の価値と作家の詩的雄弁さを強く示そうとするジョーンズの意図が読み取れる。こうしたジョーンズの意図は、ト書きを登場人物の入退場といった最小限のものに抑えている点、版図を広げていく軍人皇帝タンバレインの武勇伝のみを梗概として扉に掲げている点にも表れている。以上より発表では、O1は、笑劇的要素を排して作品の英雄的主題を際立たせ、さらにト書きを最小限にとどめることで、マーロウの詩的表現を中心とした壮麗な英雄活劇『タンバレイン』を読者に印象付けるものであると結論付けた。

『アルビオン帰還に寄せるネプチュヌスの凱旋祝典』における政治談議

ー 宮廷仮面劇の活字印刷と 1620 年代の政治文化をめぐって ー

西田 侑記（神戸学院大学専任講師）

本発表では、ベン・ジョンソンの宮廷仮面劇『アルビオン帰還に寄せるネプチュヌスの凱旋祝典』を分析対象として、その政治的意味を 1620 年代の活字文化の中に位置づけることを試みた。従来の研究では、この時期の仮面劇が大衆的なメディア産業とその消費者を諷刺し、言論統制を敷く専制的な王権を擁護していると考えられる見方がほぼ定説になっていた。これに対して本発表は、『ネプチュヌスの凱旋祝典』の国家表象に潜在する両義性を指摘し、本作が公衆メディアのポリティクスに通底する国家主義的な価値観を胚胎している可能性を提示するものである。

さらに、こうした観点から『ネプチュヌスの凱旋祝典』の印刷配布という事象に着目してみると、そこには、先行研究が論じてきたような、宮廷作家としてのステイタスを誇示せんとするジョンソンの強烈な自意識だけでなく、国政をめぐる議論のツールとして仮面劇を定義づけようとする姿勢を読み取ることができる。このことは、ジョンソンが別の仮面劇の中で言論の自由の必要性を示唆している点を考慮に入れるとき、より一層重要な意義を持つだろう。そしてその点にこそ、ジョンソンの宮廷仮面劇と公衆メディアとの意外な近似性を観取する余地が生じてくるのである。

A King and No King Q3（1631）における二行詩の追加

内藤 茜（慶應義塾大学院後期博士課程）

本報告では、ボーモント & フレッチャー作 *A King and No King* の Q3（1631）の表紙に書籍商リチャード・ホーキンズが付記した二行詩に着目し、1630 年代初頭の政治・出版背景を元に解釈することを試みた。本作は最終的にハッピーエンドに帰結する悲喜劇である。しかし、ホーキンズは二行詩において、なぜか読者が「涙を流す」ことを想定している。本報告では、ホーキンズが敢えて「涙」という反応を促すことで、政治風刺を誘発しやすいジャンルである悲喜劇としてではなく、カタルシスが劇中で完結する悲劇として本作を受容させようとした可能性を提示するものである。この背景には、当時出版業界において強まりつつあった自己検閲の圧力や、ホーキンズの主要顧客が *Serjeant's Inn* の法曹エリート層であったという事情がある。ホーキンズは、本作が内包する政治的両義性を、知的エリート層が現実の王政への批判として読むリスクを警戒し、意図的に悲劇的読解へ誘導したと考察する。このようにして、1630 年代における出版者の危機管理としてのパラテキスト戦略を分

析した。

シェイクスピア安売り合戦

佐々木 和貴（秋田大学名誉教授）

18 世紀にトンソン一族が刊行を独占していたシェイクスピア作品は、著作権法の発効により 1731 年にいわゆるパブリック・ドメインに入った。それを受けて、1734 年夏にロバート・ウォーカーという出版業者が、シェイクスピアの全作品を、格安の一冊 4 ペンスで毎週出版し始める。一方、それが事業の脅威になることに気がついたトンソンは、さらに安い 3 ペンスでの値引き競争を仕掛ける。この安売り合戦はお互いのテキストの非難の応酬にまでエスカレートするが、結局、資金力の差でウォーカーが撤退し、決着することになった。本発表では、両者の廉価本に付された嘲罵の応酬とこのスキャンダラスな状況を風刺した“Rival Printers”という版画を手がかりに、シェイクスピアという「商品」をめぐる出版業者のせめぎあいを立体的に再現してみた。さらに、すべてのシェイクスピアの作品が、このように格安価格で 1734-5 年の間に市場に溢れたことが、18 世紀中葉から、シェイクスピアの知名度が飛躍的に高まっていくための、基本的な条件を整備した出来事のひとつだったのではないかという仮説を、この合戦以降のシェイクスピア作品の演目の変化を例に挙げて提示した。

§

本セミナーには 33 名のフロア参加者があり、討議時間はごく限られていたものの、数名の参加者から貴重な助言や質問を頂戴することができた。この場を借りて、心より御礼を申し上げます。

終了後には、有楽町にて夕食をとりながら、打ち上げを兼ねたインフォーマルな情報交換会を開催した。本協会元会長の I 先生、イギリスから本大会に来日参加された C 先生、そして本大会特別講演講師として来日されていた S 先生も参加され、特に若手メンバーにとって、今後の研究発展に資する国際的ネットワーク形成の機会ともなった。



写真：セミナー本番直前の初顔合わせ

報告者：コーディネーター